

KOMAZAWA 2 × 1 KOKUSHIKAN

駒澤大学 2 × 1 国士舘大学



相手ボールを奪い攻撃に繋げる筑城
(撮影・川崎篤彦)

試合直後の2ゴールで試合を制す

危なげないゲーム

開始わずか35秒、島田の左クロスをこの日が初スタメンの高崎が合わせる。その2分後、今度は塚本の右CKから最後は廣井が押し込む。試合開始直後の相手の浮き足立っている時間帯での、畳み掛けるような2得点で駒大がゲームを制した。

前述の2得点も含め、この日の駒大のゲームへの入り方は非常に集中していた。セットプレーから幾多の決定機を演出し、前線からの守備に關しても、開始2分間での2失点でラインを深く敷いた国士大を尻目に、中盤で簡単に相手ボールをカット。そこから田谷、島田、はたまた小林へと展開し、サイドからおもしろいように攻撃を仕掛けた。終了間際のFKからの失点は余計だったが、前半はほぼ完璧な内容だったと言っても過言ではないだろう。

一方で後半は運動量の低下に伴ってラインが下がり、守勢に回りかけたが、「枚数を残し、3人のポランチを活かしてセカンドボールを拾っていたので問題なかった」と廣井。左サイドを狙われる場面も見られたが、ここは筑城をあてがって対応。「相手の右サイドはつまかったが、裏一本を気をつけた」(筑城)。「サイドを崩されても、中を守れば恐さはなかった」(廣井)。ボールを保持されても決定打は与えず、危なげない試合運びで逃げ切った。

3バック・3ポランチのシステムも、だいが板に付いてきた感があるが、選手達に言わせればまだまだ。前期の間は形づくり、どうやって戦っていくか、コミュニケーションが大事」とは筑城。ただこの日の前半を見る限り、中盤でボールを奪う際は常に数的有利な状況を作る上、ボール奪取後、そのまま攻撃に顔を出せるメリットが活かされているように見えた。このシステムの成熟過程は、我々観戦者のお楽しみとしたところだ。

善が出場停止でも、原を怪我で欠いても、国士大相手に勝点3をもぎ取る。ようやくエンジンの掛かり出した駒大が2位に浮上した。

(遠藤雅之)